

「平安後期の政治史 ～院政と平氏政権」

黒田裕樹（ブログ「黒田裕樹の歴史講座」）

1. 武士の誕生と院政の成立

「平安時代」と聞いて、皆さんはどのような印象をお持ちになられるでしょうか。一般的には、前々回（第 55 回）の講演で詳しく紹介したように、藤原氏(ふじわらし)による摂関政治が花開いた、きらびやかな時代という印象が強いようですね。

歴史的区分においては、794 年に桓武(かんむ)天皇が平安京に遷都(せんと)されたのが始まりで、源頼朝(みなもとのよりとも)が朝廷から征夷大將軍に任じられ、鎌倉幕府を開いた 1192 年までが平安時代とされていますが、その全体像については、あまり知られていないことが多いようです。

実は、約 400 年続いた平安時代は、庶民(しょみん)にとっては非常に住みにくい、地獄のような日々でした。「平安」という名前とは裏腹に、この時代は、地方を中心に国全体で争いが絶えなかったのです。なぜそうなってしまったのでしょうか。

その原因として真っ先に挙げられるのが、朝廷によって我が国直属の軍隊が廃止されたことです。征夷大將軍に任じられた坂上田村麻呂(さかのうえのたむらまろ)らが東北の蝦夷(えみし)を平定し、9 世紀の初め頃までに国内をほぼ統一した朝廷が、逆らう勢力も存在しないのに費用のかかる軍隊を所有する必要はない、と判断したからでした。

その後、朝廷周辺には、現代の警察に相当する検非違使(けびいし)が設けられたことで、辛うじて治安が守られましたが、地方においては、志願制による健児(こんでい)制度があった程度でした。

このため、盗賊を中心に力あるものが支配する世の中となり、数多くの生命や財産が奪われたことから、人々は自らを守るために自然と武装するようになりました。

これこそが、武士が誕生するきっかけだったのですが、武士団の形成に関しては、実はもう一つの理由がありました。前々回（第 55 回）の講演で詳しく紹介しました、いわゆる「おいしい」職務である国司がその原因です。彼らは任期制ですから、一定の年数が過ぎると都へ戻らなければなりません、ここで大きな問題が起きました。

国司たちは、通常よりも多くの税をかき集めて自分の利益としたほか、自己の任期中に土地をできるだけ開墾(かいこん)することで巨万の富を得ましたが、任期中に開墾した土地を都へ持って帰ることは、いくらなんでも不可能でした。せっかく開墾した土地を他人に奪われるのは納得がいかない

ということで、任期が切れた後も地方にそのまま残って土着し、同じように武士となっていく者も現れたのです。

武士たちは、各地の豪族が次第にまとまって地方武士団を形成していきましたが、やがては国司から土着した貴族の出身者たちがその中心となっていきました。その中でも特に有名だったのが、桓武平氏(かんむへいし)や清和源氏(せいわけんじ)の出身者たちでした。

このうち、桓武平氏の一族は東国に早くから土着していましたが、平将門(たいらのまさかど)は、下総(しもうさ、現在の千葉県北部など)を根拠地として武力を蓄(たくわ)えていました。将門は一族と争いを繰(くり)返すうちに、やがては国司にも反抗するようになり、939年に常陸(ひたち、現在の茨城県など)の国府(こふ)を攻め落として反乱を起こしました。この戦いを「平将門の乱」といいます。

将門はその後も下野(しもつけ、現在の栃木県など)や上野(こうずけ、現在の群馬県の大部分)の国府も攻略して関東の大半を占領し、自身が桓武天皇の子孫であることから「新皇(しんのう)」と自称しました。しかし、翌940年に、同じ東国の武士である平貞盛(たいらのさだもり)や藤原秀郷(ふじわらのひでさと)らによって、将門は滅ぼされました。

同じ頃、西国でも伊予(いよ、現在の愛媛県)の国司であった藤原純友(ふじわらのすみとも)が、瀬戸内海の海賊を率いて反乱を起こし、伊予の国府や大宰府(だざいふ)を攻め落としましたが、941年に、清和源氏の始祖(しそ)とされる源経基(みなもとのつねもと)らによって滅ぼされました。この戦いは「藤原純友の乱」と呼ばれています。

同時期に東西で起きた二つの反乱は、乱自体は何とか制圧したものの、軍事力の低下が明らかとなった朝廷に衝撃を与えるとともに、地方武士の組織が一層強化されるきっかけになりました。なお、この二つの乱は、当時の年号から「承平(じょうへい)・天慶(てんぎょう)の乱」とも呼ばれています。

地方武士の実力を知った朝廷は、彼らを侍(さむらい)として奉仕させたり、9世紀末に設けられた「滝口(たきぐち)の武士」のように、宮中の警備に用いたりするようになりました。

つまり、武士たちをガードマンとして雇(や)とうようになったのです。なお、「さむらい」という言葉は、身分の高い人のそばで仕えることを意味する「さぶらふ(＝さぶらう)」が由来です。

このようにして、軍隊を持たなかった朝廷や国司は、治安の維持のために武士を積極的に利用するようになりましたが、当時の武士は、求めに応じて各地で起きた反乱を鎮圧するのが主な役目であり、朝廷を脅(おびや)かすまでの実力には至っていませんでした。

それは、承平・天慶の乱から約100年後に、藤原道長(ふじわらのみちなが)や藤原頼通(ふじわらのよりみち)らが栄華の頂点を極めたことでも明らかであり、武士団のさらなる成長は、藤原氏の栄華の時代の後にやってくるのでした。

さて、約50年に渡って摂関政治の実権を握ってきた藤原頼通でしたが、娘が皇子を産むことがで

きなかったので、1068年に、藤原氏を外戚(がいせき、母方の親戚のこと)としない後三条(ごさんじょう)天皇が即位されました。摂関家と外戚関係のない天皇のご誕生は、宇多(うだ)天皇以来、実に約170年ぶりのことでした。

ご即位の際に35歳と働き盛りであられた後三条天皇は、学問好きで個性の強い性格をお持ちであり、お自らが意欲的に政治の刷新を行われました。

後三条天皇は、摂関家の勢いに歯止めを掛けるには、彼らの財産でもある荘園に手を加えることが一番の近道とお考えになり、1069年に「延久(えんきゅう)の荘園整理令」を出されると、摂関家や寺社が所有する荘園も例外なく、1045年以降に新たにつくられた荘園を全面的に停止しました。

この他、書類上不備があったり、国政上の妨(さまた)げとみなされたりした荘園も、すべて停止処分とされて国庫に組み入れられるなど、延久の荘園整理令はかなりの成果を挙げました。

後三条天皇の子で、1073年に即位された白河(しらかわ)天皇は、ご自身による親政を行われた後に、1086年に実子で8歳の善仁(たるひと)親王に突然譲位されました。そして、新たに即位された堀河(ほりかわ)天皇を後見するという名目で、上皇(じょうこう)として政治の実権を握られたのです。

こうして、それまでの摂関家にかわって、天皇の父(あるいは祖父)が上皇として天皇を後見される制度が新たに誕生しました。上皇の住居が院と呼ばれ、その後に上皇自身が「院」と称されることになったことから、この制度のことを「院政(いんせい)」といいます。

上皇が天皇を後見されるというのは、制度化されていた摂政や関白と異なって、あくまで私的なものでしたが、その分、法や慣例にこだわらずに、上皇がフリーハンドな立場で政治を行えるという利点がありました。

荘園整理の断行によって、院政は、国司あるいは摂関家によって、それまで半強制的に支配されていた地方豪族や開発領主たちに歓迎され、彼らを支持勢力に取り込むことによって、摂関家の勢力を抑え込むことに成功しました。

堀河天皇の父として政治の実権を握られた白河上皇は、周囲から「治天(ちてん)の君(きみ)」と称されたほか、自らの政務の場所として院庁(いんのちょう)を開かれ、実務を院司(いんし)に担当させました。

院政のもとでは、上皇からの命令を伝える院宣(いんせん)などが、国政に対して大きな影響力を持つようになりました。また、白河上皇は直属の警備機関として「北面(ほくめん)の武士」を組織されました。

院政は、白河上皇が43年間続けられた後にも、鳥羽(とば)上皇が27年、さらに後白河(ごしらかわ)上皇が32年と、合計約100年間という長期にわたって続けられたのです。

院政時代を築いた各上皇は、仏教を厚く信仰され、それぞれ出家して法皇(ほうおう)とされました。

各法皇は、白河法皇が天皇ご即位時の 1076 年に建てられた法勝寺(ほっしょうじ)などの造寺・造仏事業を行われるとともに、熊野三山(くまのさんざん)への熊野詣(くまのもうで)や、高野山への高野詣(こうやもうで)を繰り返されました。

院政が盛んとなった頃には、皇族や上級貴族に一国の知行(ちぎょう、領地を支配すること)を任せて、そこから収益を得る知行国の制度や、院自身が知行国を支配する院分国(いんぶんこく)の制度が広まりました。国の領地は次第に院や知行国主、あるいは国司の私領と化して、院政を支える経済的基盤となりました。

また、かつては摂関家に集中していた荘園が、新たに政治の実権を握った院に集まるようになり、不入(ふにゅう)の権に警察権の排除も含まれるなど、不輸(ふゆ)や不入の特権が強化されることによって、荘園の独立性が強まりました。

一方、院と同様に荘園の寄進が集中した大寺院では、自衛のために下級僧侶(そうりょ)や荘園の農民を僧兵として組織しました。大寺院では僧兵を使用して国司と争い、また自らの要求を通すために、奈良の興福寺(こうふくじ)では春日大社(かすがたいしゃ)の神木(しんぼく、神社の境内に植えられた神聖な木のこと)を、比叡山(ひえいざん)の延暦寺(えんりゃくじ)では日吉大社(ひよしたいしゃ)の神輿(しんよ、神社の祭礼に使用する「みこし」のこと)を先頭に立てて京都へ乱入し、朝廷へ強訴(ごうそ)することもありました。

朝廷はこれらの圧力に対抗するために、源氏や平氏といった武士を用いて警護や鎮圧にあたらせましたが、このことが、やがて武士の中央政界への進出をもたらすことになるのです。

さて、それまでの摂関家にかわり、院政が行われるようになったわけですが、摂関家の荘園が減少した一方で、院や大寺院の荘園が増加して、荘園自身の権限も強化されるなど、土地の支配をめぐる根本的な制度には、結果として大きな変化はありませんでした。

また、院に経済的基盤が集中したことによって、治天の君と称された上皇(または法皇)の権力は飛躍的に高まり、さらに「天皇の父(あるいは祖父)」という強い立場もあって、院の権力は、歯止めがかからないほどの独裁的な色彩を見せるようになりました。

例えば、白河法皇による「賀茂川(かものがわ)の水と、双六(すごろく)の賽(さい、サイコロのこと)の目、それに山法師(やまほうし、延暦寺の僧兵のこと)だけは自分の意にならない」というお言葉が有名ですが、裏を返せば、先述の三つ以外については自己の思いのままに動かせる、という意味でもあるわけです。

白河法皇や鳥羽法皇は、やがては皇位の継承についても意見されるようになり、結果として政治の混乱を招くことになりました。また、土地制度に大きな変化がなかったことが、全国各地の武士の不満を高めることとなり、来るべき新しい時代へ向けての大きな原動力と化していったのです。

2. 武士団の成長と源氏の躍進

平将門の乱から約 90 年後の 1028 年、将門の遠縁にあたる平忠常(たいらのただつね)が、強大な武力

を背景に上総(かずさ、現在の千葉県中部)で反乱を起こしました。乱は3年近くも続きましたが、清和源氏の血を引く源頼信(みなもとのよりのぶ)によって忠常は倒されました。この戦いを「平忠常の乱」といいます。

清和源氏は、先述したように源経基が始祖とされており、経基の子である源満仲(みなもとのみつなか)は、摂津の多田(ただ、現在の兵庫県川西市多田)に土着していましたが、969年に起きた「安和(あんな)の変」で謀反(むぼん)を密告して、源高明(みなもとのたかあきら)を失脚させた功績によって、摂関家に接近しました。

源満仲の子のうち、源頼光(みなもとのよりみつ)は各地の国司を歴任し、その際に蓄えた財産を利用して、藤原道長の側近として仕えることによって、武家の棟梁(とうりょう)としての地位を高めました。

その頼光の弟にあたるのが、平忠常の乱を鎮圧した源頼信でした。忠常の反乱によって平氏の勢力が衰えた一方で、源氏は頼信の活躍によって、東国における勢力を広げるきっかけをつくったのです。

ところで、平安時代初期に坂上田村麻呂らが蝦夷(えみし)を平定して以来、東北地方は陸奥(むつ)と呼ばれ、朝廷の支配下に置かれてきましたが、この頃の東北地方は、金や銀などの貴金属や、毛皮などの珍しい物産の宝庫であり、繁栄を極めていました。

こうした豊富な経済力に支えられて、東北地方では現在の太平洋側を安倍氏(あべし)が、日本海側を清原氏(きよはらし)が地方豪族として支配し、その力は次第に強くなっていきました。

1051年、安倍氏の棟梁であった安倍頼時(あべのよりのとき)が反乱を起こしました。朝廷では源頼信の子である源頼義(みなもとのよりよし)を陸奥守(むつのかみ)・鎮守府(ちんじゅふ)将軍に任じて、頼義の子である源義家(みなもとのよしえ)とともに鎮圧を命じました。

しかし、平将門を滅ぼした藤原秀郷の子孫とされる藤原経清(ふじわらのつねきよ)が寝返ったことで、朝廷側は苦戦し、戦いは長期化しました。

源頼義は、同じ陸奥の豪族である清原氏に助けを求めると、清原氏がこれに応じたことで戦局は一変し、1062年に安倍氏や藤原経清が滅ぼされて、戦いは終結しました。

1051年から1062年まで続いた安倍氏による一連の反乱は、「前九年(ぜんくねん)の役(えき)」と呼ばれています。

反乱の後、安倍氏の領地は清原氏に与えられ、清原氏が事実上の東北地方(=陸奥)の覇者となりました。なお、滅ぼされた安倍氏の中で流罪(るざい)となり、生き残った安倍宗任(あべのむねとう)の子孫が、九州で松浦党(まつらとう)と呼ばれる武士団として活躍したと伝えられ、また、その血脈は現代にまで残り、21世紀には国政のトップにまで登りつめました。

安倍晋三(あべしんぞう)内閣総理大臣のことです。

さて、前九年の役の際に朝廷に味方した清原氏でしたが、戦後の恩賞によって陸奥一体の支配権を与えられるとともに、棟梁の清原武則(きよはらのたけのり)が新たに鎮守府将軍に任ぜられるなど、前九年の役は清原氏にとって最大の利益をもたらしました。

また、滅ぼされた藤原経清の未亡人が、武則の子の清原武貞(きよはらのたけさだ)の妻として新たに迎えられるました。

武貞には既(すで)に嫡子(ちやくし、跡継ぎのこと)である清原真衡(きよはらのさねひら)がいましたが、未亡人と藤原経清との間の連れ子である清原清衡(きよはらのきよひら)を養子とし、また未亡人との間に清原家衡(きよはらのいえひら)が生まれました。武貞の子はいずれも父親もしくは母親が異なるという複雑な関係となり、兄弟同士の不仲をもたらしてしまいました。

こうした兄弟同士の不仲が、やがて清原氏の内紛を引き起こし、ついには兄弟同士で大きな戦乱になってしまいました。1083年から1087年まで続いたこの戦いのことを「後三年(ごさんねん)の役(えき)」といいます。この内紛に乗じて源氏による陸奥の支配を目指した源義家は、朝廷から陸奥守を拜命して、後三年の役に積極的にかかわりました。

戦いは、1087年に藤原経清の遺児である清原清衡が勝利して終わりましたが、言わば清原氏の私闘に参加しただけの源義家には、朝廷から何の恩賞も与えられず、陸奥守の官職も1088年に辞めさせられました。途方に暮れた義家は、自腹を切って部下に恩賞を与えましたが、皮肉にもこのことで義家は東国の武士たちの心をとらえ、源氏を棟梁と仰ぐ深い信頼関係が生まれたのです。

なお、前九年の役は11年、後三年の役は4年続いているのに、なぜ「九年」「三年」と名づけられているかについては、様々な説が挙げられていますが、正確には分かっていません。

後三年の役の勝者となった清原清衡は、源義家が東北を去った後に、藤原氏に復姓して藤原清衡(ふじわらのきよひら)を名乗り、豊富な資金力で工作した結果、朝廷から陸奥の支配権を認められました。

藤原清衡は奥州の平泉(ひらいずみ、現在の岩手県平泉町)を本拠地(ほんきょち)として陸奥を完全に手中に収め、清衡の子である藤原基衡(ふじわらのもとひら)、さらに基衡の子である藤原秀衡(ふじわらのひでひら)の三代、約100年にわたって奥州藤原氏が全盛を極める基礎を固めたのです。

3. 平氏を栄光へと導いた二つの乱

さて、平忠常による反乱以来ふるわなかった平氏でしたが、桓武平氏の流れをくむ伊勢(いせ)平氏が次第に頭角を現しました。源義家の子である源義親(みなもとのよしちか)が、1107年に出雲(いずも、現在の島根県東部)で反乱を起こしましたが、翌1108年に平正盛(たいらのまさもり)によって滅ぼされました。

この功績によって、正盛は白河法皇の厚い信頼を受け、直属の警備機関である北面の武士として登用されると、正盛の子の平忠盛(たいらのただもり)も、瀬戸内海の高僧を討ったことで白河法皇の孫の鳥羽法皇に信頼され、武士として初めて昇殿を許されました。いわゆる「殿上人(てんじょうびと)」のことです。

忠盛は西国を中心に多くの武士を従え、平氏が繁栄する基礎をつくりましたが、昇殿が許された武士の実力は留まることを知らず、12世紀半ば頃に起きた二つの反乱によって、平氏が朝廷にかかわって政治の実権を握る道を切り拓(ひら)くことになりました。

その背景には朝廷内の権力争いがあり、またそれを上手に活用した人物こそが、有名な平清盛(たいらのきよもり)だったのです。

先述のとおり、この頃の朝廷では、摂関家から政治の実権を取り戻すため、天皇を退位した上皇(出家後は法皇)が、子(あるいは孫)の天皇の父(もしくは祖父)として政治を後見するという院政が行われていました。

院政によって、上皇(=法皇)の地位は「治天の君」と称されるまでになりましたが、その独裁的な政治手法は周囲の混乱をもたらすことになり、それは皇位の継承に関しても例外ではありませんでした。

白河法皇は孫の鳥羽天皇と藤原璋子(ふじわらのしょうし)との間にお生まれになった顕仁(あきひと)親王を大変可愛がられ、親王が5歳になられた1123年に、崇徳(すとく)天皇として即位させました。

祖父の白河法皇によって無理やり退位させられた鳥羽上皇(のち法皇)は、いつしか自身の退位の引き金となった我が子の崇徳天皇に対して、良い感情を持たれなくなりました。そんな中、1129年に白河法皇が崩御(ほうぎょ)され、鳥羽上皇が待望久しい「治天の君」になられました。

鳥羽上皇は、藤原得子(ふじわらのなりこ)との間にお生まれになった躰仁(なりひと)親王を可愛がられ、1141年に近衛(このえ)天皇として即位させ、崇徳天皇を退位に追い込みました。

しかし、近衛天皇は1155年に子孫を残されぬまま崩御されました。次の天皇は、崇徳上皇の子である重仁(しげひと)親王が継承される可能性が高かったのですが、崇徳上皇の血統を嫌われた鳥羽法皇は、崇徳上皇と同じ璋子との間にお生まれになり、上皇の弟にあたる雅仁(まさひと)親王を後白河天皇として強引に即位させました。

我が子である重仁親王が天皇として即位しなければ、崇徳上皇は「治天の君」として院政を行うことができません。鳥羽法皇による冷酷ともいえる仕打ちに激怒された崇徳上皇は、1156年に鳥羽法皇が崩御されるとクーデターを計画され、兄の藤原忠通(ふじわらのただみち)と関白の座を争って敗れた藤原頼長(ふじわらのよりなが)を味方に引き入れられるとともに、自前の軍をお持ちでなかったため、武士である平忠正(たいらのただまさ)や源為義(みなもとのためよし)らと呼ばれ寄せられました。

しかし、崇徳上皇のお考えを先読みされた鳥羽法皇は、ご自身の崩御の前に後白河天皇や関白の藤原忠通に味方する武士団を準備され、ご自身の信頼が厚かった平忠盛の子であり、忠正の甥(おい)にあたる平清盛や、源為義の子である源義朝(みなものよしとも)らが参集しました。

こうして 1156 年 7 月、兄弟や親子、さらには叔父と甥という血族同士が争う事態となってしまいました。これを当時の年号から「保元(ほうげん)の乱」といいます。この戦いは、機先を制して夜襲をかけた後白河天皇側が一日で勝利を収めました。崇徳上皇は出家されたものの許されずに讃岐(さぬき、現在の香川県)に流罪となられ、藤原頼長が流れ矢を受けた傷がもとで死亡したほか、源為義や平忠正らが処刑されました。

1158 年、後白河天皇は子の二条(にじょう)天皇に譲位され、自らは上皇として院政を開始されましたが、まもなく後白河上皇の近臣であった、信西(しんぜい)と藤原信頼(ふじわらののぶより)との対立が激しくなりました。

一方、保元の乱の戦功によって、平清盛や源義朝にも恩賞が与えられましたが、その差は歴然としていました。九州の大宰大貳(ださいのだいに)に任じられ、中国の宋(そう)とのいわゆる「日宋貿易」を行って経済的実力が高まった清盛に対して、義朝には十分な恩賞が与えられなかったばかりか、父である源為義を自らの手で処刑したことで、周囲から「父殺し」とさげすまれていたのです。

義朝は信西に不満を持っていた藤原信頼に協力して、1159 年に清盛が熊野詣(くまのもうで)に出かけた隙(すき)をついてクーデターを起こし、後白河上皇や二条天皇を軟禁したほか、信西を追い込んで自害させることに成功しました。

しかし、急を聞いて京へ戻った清盛によって、後白河上皇と二条天皇が脱出に成功されると、形勢は一気に逆転しました。清盛軍と戦って敗れた義朝は再起を期して逃亡中に襲われて死亡し、逃げ切れないと思った信頼は後白河上皇を頼って自首しましたが、最期には処刑されてしまいました。この戦いは、当時の年号から「平治(へいじ)の乱」と呼ばれています。

さて、平治の乱で非業(ひごう)の最期を遂げた義朝には多くの子がいましたが、長男の源義平(みなものよしひら)は処刑され、三男で当時 14 歳だった源頼朝や、九男でまだ赤ん坊だった源義経(みなものよしつね)らが捕らえられて、清盛の前に引き出されました。

選挙という民主的な手段がある現代とは違って、昔は政敵とみなされた人物は、本人のみならず、子供であろうが一族もろとも殺されるのが常でした。なぜなら、身内を殺されたことで残った恨みは消えることなく、当時の子供がそのまま大人になれば、復讐のために生命を奪おうとする可能性が十分考えられたからです。

こうした原則からすれば、清盛によって捕らえられた頼朝や義経らの運命は風前の灯(ともしび)であり、処刑されてもおかしくないはずでした。しかし、清盛は結果として彼らの生命を奪おうとはしませんでした。なぜ清盛は頼朝や義経を助けたのでしょうか。

その背景には、二人の女性が存在していたのです。

清盛の母は早くに亡くなりましたが、継母(まはは)にあたる池禅尼(いけのぜんに)が健在でした。池禅尼は、捕らえられた頼朝の姿を見て「若くして亡くした自分の子に似ているから」という理由で、清盛に対して頼朝の生命を助けるように頼みました。

はじめのうちは継母を無視して処刑しようとした清盛でしたが、池禅尼が「夫(=清盛の父である忠盛のこと)が生きていればこんなつれないことは言わないだろうに」と激しく抗議したため、仕方なく頼朝を伊豆(いず、現在の静岡県の一部)へと流罪にしました。

一方、赤ん坊だった源義経の場合は、義経の母であった常盤御前(ときわごぜん)が絶世の美女であったことで、御前が清盛の愛人となることを条件に義経が助命されたと伝えられています。

いずれにせよ、この時に頼朝・義経兄弟を生かしてしまったことが、やがては平氏の将来に暗い影を落とすことになるのですが、当時日の出の勢いであった清盛が気づくはずもないことでした。

4. 平氏政権に秘められていた「大きな欠陥」

さて、保元の乱や平治の乱によって、朝廷内の勢力争いに武士の持つ戦闘力が利用されたということは、それを背景として武士が積極的に政治に介入し始めたことも意味していました。

1160年、清盛は正三位(しょうさんみ)に昇進して、武士でありながら公家(くげ)の身分を得ることとなり、それまで貴族から見下されていた武士が初めて公家の仲間入りをし、彼らと肩を並べることになりました。後に清盛は、1167年には従一位(じゅういちい)の太政大臣(だじょうだいじん)にまで昇進します。

また、清盛は高倉(たかくら)天皇に自分の娘の平徳子(たいらのとくこ)を嫁(とつ)がせ、二人の間に言仁(ときひと)親王がお生まれになると、親王が3歳の1180年に安徳(あんたく)天皇として即位させたことで、清盛は天皇の外祖父(=母方の祖父のこと)にまで出世しました。

清盛によって隆盛を極めた平氏の下には、全国各地から500以上の荘園が集まると同時に、平氏が支配を任された知行国(ちぎょうこく)の数も、全国の半数近くの30数カ所にまで拡大するなど、経済的な基盤も強化されました。

このような政治的・経済的な背景に支えられた平氏によって、我が国史上初めて武士が本格的に政治の実権を握りました。しかし、その政権は清盛が天皇の外祖父になったり、平氏一門が次々と朝廷の要職に就いたりしたことで、摂関家のような貴族的な性格を持ったことから、平氏による権力の独占は、やがて周囲の大きな反発を招くことになるのです。

平氏による政権に反発する勢力の中には、後白河法皇もおられました。そもそもご自身の院政の強化のために武士を使っていたはずが、いつの間にかその武士に政権を奪われたことがご不満であら

れたのです。1177年、後白河法皇の近臣たちが京都の鹿ヶ谷(しがたに、現在の京都市左京区)に集まって平氏打倒の計略をめぐらしていましたが、事前に発覚して失敗しました。これを「鹿ヶ谷の陰謀」といいます。

陰謀の背景に後白河法皇の存在があったことを知って激怒した清盛は、2年後の1179年に軍勢を率いて後白河法皇を幽閉して院政を停止し、近臣たちの官職をすべて解くなどのクーデターを起こしました。なお、清盛の孫にあられる安徳天皇が即位されたのは、この翌年(1180年)のことです。

清盛の立場から見れば、自己の政権を危うくしたのは後白河法皇側であり、法皇のかわりに平氏と血のつながりのある天皇を立て、反対勢力を封じ込めて一門で官職を固めるのは当然の防衛手段といえました。しかし、法皇を幽閉するという強硬な手段が、周囲のさらなる反発を招いてしまったのです。

それに加えて、平氏による政権には自身が気づいていない「重大な欠陥」があり、その欠陥こそが後の平氏滅亡への直接的な引き金となってしまったのですが、それはいったい何だったのでしょうか。

カギを握るのは、この時代の「土地制度」です。

各地で武士が誕生し、その武力を高めることによって、地方を中心に武士が世の中を支えるようになりましたが、そんな彼らには大きな悩みがありました。

平安時代の頃には、それまでの公地公民の原則が完全に崩壊して、荘園制度が全盛期を迎えていましたが、この制度には大きな欠陥がありました。それは、荘園の所有が上流貴族や寺社のみ認められていたということです。

実際に田畑を耕(たがや)しているのは、他ならぬ武士たちなのですが、朝廷は彼らの所有を認めようとしませんでした。困った武士たちは、仕方なく摂関家などの有力者に土地の名義を移し、自らは「管理人」の立場となりましたが、これほど不安定な制度はありません。

「自ら開墾した土地は、自身の手で堂々と所有したい」。いつしか武士の多くが切実な願いを持つようになりましたが、武士の心の内が理解できない貴族たちによって政治が行われている以上は、その願いは叶えられそうもありませんでした。

そんな折に、平氏が政治の実権を握ることに成功したことで、自分たちと同じ武士である平氏であれば、必ずや「武士のための政治」を実現してくれるに違いない、と全国の武士たちが期待したのです。

ところが、祖父の正盛の代から皇室や貴族と接することの多かった清盛には、「武士のための政治」がどのようなものであるかが理解できませんでした。明確なビジョンを持っていなかったゆえに、清盛は摂関家と同じやり方で政治を行う以外に手段がなかったのですが、結果的にこれが大失敗で

した。

なぜなら、平氏が摂関家の真似をただけでは、武士たちの立場に全く変化がなかったからです。人間というものは期待が大きければ大きいほど、裏切られた場合の怒りが大きくなるものですが、この頃の武士たちも例外ではなく、平氏への期待が大きかっただけに「同じ武士なのに、なぜ俺たちの思いが分からないのか」と余計に不満を持つようになりました。

一方、それまで政治を行っていた貴族たちも、身分が低いうえに血を流す「ケガレた」仕事しかしないと見下(みくだ)していた武士である平氏が、自分たちの真似をしたことに対して激しく反発していました。すなわち、平氏の行った政治は、武士と貴族の双方から問答無用で拒否されてしまったのです。

源頼朝や足利尊氏(あしかがたかうじ)、織田信長(おだのぶなが)や豊臣秀吉(とよとみひでよし)、あるいは徳川家康(とくがわいえやす)など、後の世で武士による政治が広く支持されたという現実を考えれば、初めてであるがゆえに、確固たるビジョンを持たない「開拓者」としての立場でしかなかった、平氏の悲劇でもありました。

武士として初めて政治の実権を握った平氏は、当時の国民の代表たる武士たちの共感を得ることができませんでした。いくら武力など強引な手段で世の中を統治したところで、国民の理解が得られなければ、その支配は絶対に長続きできないのです。

平氏の場合も決して例外ではなく、やがて「武士のための政治」を実現させる他の勢力が現れたことで、全盛期には「平家に非(あら)ずんば人に非(あら)ず」とまでいわれた平氏の天下が、あっという間に崩れ去ってしまいました。

では「武士のための政治」とは一体どのようなものなのでしょうか。そして、平氏にかわって政治の実権を握った勢力には、なぜ「武士のための政治」が理解できたのでしょうか。

そのカギを握る人物こそが、かつて清盛が生命を助けた源頼朝なのです。

5. 頼朝の台頭と平氏の滅亡

平治の乱の後、池禅尼によって生命を助けられた頼朝でしたが、流人(るにん)という身分での伊豆での暮らしは決して楽ではありませんでした。しかし、伊豆で様々な体験を積み重ねることによって、頼朝は武士たちの日常の生活やその願いなどがよく分かるようになっていました。

要するに、頼朝は若い頃に武士としての「実地訓練」を積んでいたのです。やがて頼朝が1180年に平氏打倒に立ち上がると、当初は苦戦したものの次第に武士たちの同意を得て、同年の「富士川(ふじかわ)の戦い」で勝利するなど大勢力となっていきました。

なぜなら、平氏に一度「裏切られた」かたちとなった武士たちが、自分と同じ経験をした頼朝であ

れば、今度こそ期待に応じてくれるに違いないと判断したからです。

一方、頼朝をはじめ各地の源氏の挙兵に危機を感じた清盛は、1180年6月に平氏の経済的な本拠地である福原(ふくはら、現在の兵庫県神戸市)に都を遷(うつ)しましたが、余りにも性急に行ったことで皇族や貴族、あるいは寺社の反対が根強く、結局11月には京都に戻ることになりました。強引な手法で体制を固めてきた平氏の政権も、この頃には陰(かげ)りを見せていたのです。

どんなに大きな勢力であっても、人材が育たなければいつかは必ず衰えますし、不可抗力な事態が起こった場合には、人々の恨みは時の政権に向けられます。平氏の政権も例外ではなく、末期になると立て続けに不運が襲うようになりました。

まずは人材不足が平氏を悩ませました。清盛の長男で将来を期待されていた平重盛(たいらのしげもり)が、父に先立って1179年に42歳で亡くなり、娘婿(むすめむこ)にあたり、院政を行われるはずだった高倉上皇も、1181年1月に崩御されました。

そして、何よりも最大の不幸だったのが、清盛自身が病気となって、1181年閏(うるう)2月に64歳でこの世を去ってしまったことでした。清盛の死後は、三男の平宗盛(たいらのむねもり)が平氏の新たな棟梁(とうりょう)となりましたが、清盛ほどの器量は持っておらず、また後白河法皇が院政を再開されたこともあって、平氏による政権の将来に暗雲が立ち込め始めましたが、その原因は人材不足だけではありませんでした。

平氏に逆らった勢力には寺社も含まれていました。平氏は1180年12月に奈良の東大寺(とうだいじ)や興福寺(こうふくじ)の寺社勢力を鎮圧するため出兵しましたが、風の強い日に攻めたために火が燃え広がり、東大寺の大仏が焼け落ちるといふ大惨事となったことで、平氏は「仏敵(ぶつてき)」呼ばわりされてしまったのです。

さらに、平氏を待ち受けていたのが大飢饉(だいききん)でした。1180年は異常気象に悩まされたこともあって農作物が不作となり、西日本を中心に餓死者(がししゃ)が相次いだばかりか、この状態が数年も続くという騒ぎになりました。これを当時の年号から「養和(ようわ)の大飢饉」といいます。

仏敵となったのは火の勢いがたまたま強かったのが理由であり、ましてや大飢饉の責任が平氏にあるはずもないことです。しかし、当時の人々は「飢饉は大仏を焼いた『崇(たた)り』」であり、すべての原因は平氏にある」と固く信じており、平氏への恨みの声がますます高くなりました。

そんな中、源義仲(みなもとのよしなか)が1183年に倶利伽羅峠(くりからとうげ)の戦いで平氏の軍勢を破ると、身の危険を感じた平氏は、安徳天皇とともについに都落ちをしてしまったのです。

しかし、備中(びっちゅう、現在の岡山県西部)の水島(みずしま)では義仲相手に大勝するなど、本拠地である西国において平氏はまだまだ力を持っており、都での復権を虎視眈々(こしたんたん)と狙(ねら)っていました。

また、瀬戸内海がある西国では海戦が多く、東国の山育ちの人間が多い源氏に対し、強力な水軍を持っている平氏の優位は動きませんでした。このようなことから、平氏と源氏との戦いは当分の間は一進一退を繰り返すであろうと思われていました。

ところが、結果として平氏は都落ちからわずか2年足らずで滅亡しているのです。どうしてこのようなことになったのでしょうか。

そのカギを握る人物こそが、頼朝と同様に清盛が助命した源義経なのです。

赤ん坊の時に生命を助けられた義経は、母の元で数年過ごした後に、僧になるため京都の鞍馬寺(くらまでら)に入れられましたが、やがて父の復讐を果たすために脱出し、諸国を転々とした後に、奥州の藤原秀衡(ふじわらのひでひら)を頼りました。

秀衡は、先述のとおり、平泉(ひらいずみ、現在の岩手県平泉町)を中心として、平安末期に栄華を誇った奥州藤原氏の三代目でした。義経が22歳のとき、兄の頼朝が挙兵したと聞くと、義経は自分の家臣を引き連れて頼朝に面会し、以後は頼朝の指揮下に入りました。

ところで、義経の家臣のなかで一番名前が知られているのは、何といても武蔵坊弁慶(むさしぼうべんけい)でしょう。弁慶は実在の人物ですが、義経が牛若丸(うしわかまる)と呼ばれた少年の頃に、京都の五条大橋で弁慶と対決した物語はあまりにも有名ですね。

しかし、この話はあくまで伝説であり、鞍馬寺を抜け出してから、秀衡の保護を受けるまでの数年間の義経の行動は、未だに謎に包まれたままです。ただ、間違いなく断言できることは、義経が頼朝に会うまでのあいだに、類(たぐい)まれな「戦術(=戦いに勝つための具体的な方法のこと)」を身に付けていた、ということです。

なぜそうなのかというと、時間をかけて培(つちか)われた彼の才能が、この後の平氏との戦いの中で、遺憾(いかん)なく発揮されていくからです。

さて、1183年に都落ちした平氏を追討することを決意した頼朝でしたが、どちらかといえば政治家向きだった彼は鎌倉で内政に専念し、代わりに弟である源範頼(みなもとののりより)や義経に戦わせましたが、いつしか義経が戦いの指揮をとるようになりました。

1184年3月、一ノ谷(いちのたに、現在の神戸市)に陣を敷き、山を背後に軍勢を構えた平氏は、正面から攻めてくるであろう源氏を迎え撃つべく待っていたのですが、義経は山の頂上から、急斜面のため常識では通れそうもない坂を馬ごと一気に下り、平氏の背後を奇襲しました。

不意をつかれた平氏は大混乱となり、一ノ谷を放棄して西へ敗走せざるを得ませんでした。義経の思わぬ奇襲によって源氏が勝利を得たこの戦闘は「一ノ谷の戦い」と呼ばれ、また義経が急坂を一気に下った戦いぶりは、後の世に「鶉越(ひよどりごえ)の逆(さか)落とし」と称(たた)えられました。

義経には常識にとらわれない思考能力と、一瞬のスピードで決着をつけようとする、天才的な戦術能力がありました。義経という戦争の天才を得た源氏と、人材不足に悩む平氏との大きな差が、それぞれの今後を象徴していました。

一ノ谷を放棄した平氏は、屋島(やしま、現在の香川県高松市)に本拠をかまえて四国を確保しようとした。屋島の北側には瀬戸内の海が広がっており、平氏は源氏が当然海を渡ってやって来ようと思われ、待ち伏せして全滅させようと考えていたのです。

ところが、ここでも義経が自慢のスピードで奇襲をかけてきました。1185年2月、義経は嵐の中を少数精鋭の騎馬武者とともに荒海を馬ごと船出しました。通常なら難破してもおかしくないのですが、歴史の神様を味方につけた義経は、嵐を追い風に、極めて短時間で上陸を果たすことができました。

上陸した義経軍は、海岸伝いに浅瀬を馬で渡って屋島の背後に回り、安徳天皇がおられた御所を急襲しました。またしても義経に不意をつかれた平氏は、天皇を死守するためにも逃げる以外に選択肢がなく、屋島も放棄せざるを得なかったのです。なお、この戦闘は「屋島の戦い」と呼ばれています。

ちなみに、源氏の武者である那須与一(なすのよいち)が、平氏が所有する船に立てられた、日の丸が描かれた扇の要(かなめ)を見事に射抜(いぬ)いたという、平家物語の有名なエピソードはこの際のもので、このエピソードこそが、後の平氏の運命を物語っていたように思われてなりません。

屋島を放棄した平氏は、それ以前に山陽道や九州の大宰府(ださいふ)も源氏に抑えられていたことによって、本州と九州とを結ぶ関門海峡沿いの壇ノ浦(だんのうら、現在の山口県下関市)に追いつめられてしまいましたが、壇ノ浦での戦いは完全な海戦となるため、経験豊富な平氏にはまだ希望が残っていました。

それに比べ、本格的な海戦の経験のない源氏の不利は大きく、さすがの義経も苦戦するかと思われたのですが、いざフタを開けてみれば義経の完勝で終わりました。1185年3月に行われたこの戦闘は「壇ノ浦の戦い」と呼ばれていますが、なぜ義経は未経験の海戦で勝つことができたのでしょうか。

実は、義経は平氏の軍船の操縦者をことごとく射殺することにより、敵の船を動けなくしてしまったのです。船の操縦者は殺してはいけない、というよりそもそも戦いに参加していないというそれまでの常識を打ち破る、まさに「コロンブスの卵」的な、義経の柔軟な発想でした。

船が動かなくては勝てるはずがありません。平氏側の武将も奮戦して一時は義経を追いつめ、この際に義経が「八艘(はっそう)飛び」で難を逃れるという場面もありましたが、最終的には敗北し、あれほどの栄華を誇った平氏にも最期の時がやって来ようとしていました。

壇ノ浦の戦いの敗北で死を決した清盛の妻の二位尼(にいのあま)は、乗っていた船上でまだ8歳と幼

かった安徳天皇を抱き寄せ、三種の神器(じんぎ)の宝剣と神璽(しんじ)を身に着けました。

抱き上げられた安徳天皇が「私をどこへ連れて行くのか」と問いかけられると、二位尼は涙ながらに「弥陀(みだ)の浄土へ参りましょう。波の下にも都がごぞいます」と答えて、安徳天皇とともに海に身を投じました。

その後、平氏一門の女性や武将たちも、安徳天皇に続くかのように次々と入水(じゅすい)しました。生き残った武将も源氏に捕えられてそのほとんどが処刑され、平治の乱の勝利以来、約 25 年続いた平氏による政権はついにその幕を閉じたのです。

「祇園精舎(ぎおんしょうじゃ)の鐘の声、諸行無常(しよぎょうむじょう)の響きあり。娑羅双樹(さらそうじゆ)の花の色、盛者必衰(じょうしゃひつすい)の理(ことわり)をあらはす。おごれる人も久しからず、唯(ただ)春の夜の夢のごとし。たけき者も遂には滅びぬ、偏(ひとえ)に風の前の塵(ちり)に同じ」。(「平家物語」より)

哀切極まる平氏の最期には、万感胸に迫るものがありますね。

こうして武士による政権を初めて実現した平氏は滅亡しましたが、その流れを受け継いだ源氏によって鎌倉幕府が成立しました。つまり、平氏の滅亡後も武士による政権は続いており、しかも本格化しているのです。

源氏や北条氏、あるいは足利氏や徳川氏といえども、当時の国民(あるいは武士)の支持を受けていたとはいえ、平氏と同じ武家政権であることに変わりはありません。それなのに彼らの政権は平氏と違って長く続きました。

その理由として考えられるのは、それぞれの政権が前任者の「失敗」を教訓としてきたということです。その具体的な内容について今回は省略しますが、人間というものはそもそも失敗から成長するということを考えれば、それも道理ではあります。

ということは、人間は前例のないことに関しては戸惑うとともに、失敗すれば大きく反発するものでもあるということです。我が国で初めて武家政権を樹立した「開拓者」であった平氏は、それゆえに滅亡するという「悲劇」を経験することになったのですが、彼らの足跡はその後の我が国の繁栄には絶対に欠かすことができません。

我が国の歴史における大きな流れに偉大な功績を残した平氏の生き様を学ぶことで、私たち自身が人生の幅を広げるとともに、次代に未来を託せるような日々を送りたいものですね。

6. 「戦略」が理解できなかった「戦術」の天才

さて、平氏との一連の戦いで、会心の大勝利を収めた源義経でしたが、皮肉なことに、このとき既(すで)に彼には「破滅」の兆(きざ)しが見えていました。義経が平氏を滅亡させたことは、確かに「戦術」としては申し分なかったのですが、彼の兄である頼朝は、弟が仕出かした「ある行為」に激怒して

いたのです。

平氏を滅亡させることができたのは、確かに義経の類(たぐい)まれな戦術によるものであり、その功績は大きいものがありました。しかし、頼朝は平氏滅亡を喜ぶどころか、義経による「信じがたい失策」に対して激怒しました。なぜならば、義経が天皇であることを証明する大事な「三種の神器」のすべてを取り戻すことができなかつたからです。

頼朝個人としては、父の源義朝の仇(かたき)である平氏が滅亡して嬉しくないはずがありません。しかし、彼は自分の利害よりも、武士全体の利益を優先し、そのための「戦略(=戦争に勝つための総合的あるいは長期的な計略のこと)」を考える政治家でもありました。

関東で力をつけて、平氏を滅亡寸前にまで追い込んだ頼朝でしたが、それはあくまで軍事力のみのものであり、武士に土地の個人所有を認めさせるといった「武士のための政治」を行うには力不足でした。そこで頼朝は、当時は形式化してはいたものの、荘園などを監視する立場である朝廷との交渉によって「武士のための政治」を実現させようと考えており、その際に切り札となるのが「三種の神器」だったのでした。

実は、平氏が安徳天皇を引き連れて都落ちした際に、三種の神器も一緒に持ち去られてしまいました。このため、後白河法皇は、やむなくご自身の「治天の君」としての権威で、後鳥羽(ごば)天皇を神器なしで強引に即位させていました。

この点に目をつけた頼朝は、三種の神器を自らの手で取り返し、後白河法皇に引き取らせることによって、自身がめざした「武士のための政治の実現」に大きく前進しようと考え、義経に対して「平氏滅亡よりも三種の神器の奪回を優先させて、どんなことがあっても取り戻してこい」と厳命(げんめい)した可能性が高いのです。

ところが、軍事的センスは高いものの、頼朝の政治的センスが全く理解できなかった義経が、平氏滅亡に気をとられているうちに、清盛の未亡人が、安徳天皇とともに三種の神器を抱えて海の中へ飛び込んでしまいました。

神器のうち、勾玉(まがたま)と鏡は取り戻せましたが、草薙(くさなぎ)の剣は海の底に沈んでしまって、ついに取り戻せなかつたのです。これでは、神器を切り札として後白河法皇に武士の要求を認めさせるどころか、失態を問われることで、かえって頼朝の地位が危うくなる可能性すらありました。

軍事の天才である義経であれば、三種の神器を取り戻してくれると期待していただけに、頼朝は義経に対して激怒したわけですが、義経自身は、平氏を滅亡させたことの方がよほど重要であると信じ込んでおり、頼朝がなぜ自分に激怒するのか分からないままでした。

これに加えて、義経はさらに致命的なミスを犯していました。頼朝の許可もなく、後白河法皇からの検非違使(けびいし、主として京都の治安維持を担当する役職のこと)への任官を勝手に受けてしまったのです。

なお、任官後の義経は「九郎判官(くろうほうがん)」と呼ばれましたが、これが後に「判官鼻眞(ほうがんひいき)」という言葉を生むこととなります。

この義経の「朝廷からの任官を受ける」という行為は、実は頼朝のそれまでの血のにじむような努力を全部無駄にしてしまいかねない、とんでもないことでした。なぜそう言い切れるのでしょうか。

頼朝が目指す「武士のための政治」というのは、朝廷から独立した軍事政権を確立するということを意味していました。もし政権の独立性を維持しようとするれば、当然部下への人事権も、頼朝側で独自のものを持たなければなりません。

一方、官位というものは朝廷から授かるものですから、それを頼朝の承認もなく受け取るということは、頼朝の権威を丸潰(つぶ)れにしてしまいかねない「愚かな行為」なのです。それなのに、よりによって頼朝の実の弟である義経が、あっさりと朝廷から勝手に官位を受けてしまったのですから、頼朝にとってはたまったものではありません。

現実には、この後多くの頼朝の家臣が「弟の義経様が受け取るのであれば」といわんばかりに、朝廷から次々と任官を受けてしまいました。これらに対する頼朝の嘆きや怒りは凄まじいものであったと伝えられています。

しかし、義経自身は、三種の神器と同様に、自分が犯した大きなミスに全く気がついていませんでした。後に頼朝に送った手紙において「自分が朝廷の任官を受けることは、源氏一族にとって名誉なことではないですか」と書いているくらいです。

「政治家」の頼朝と「軍人」の義経とでは、考えがまるで異なるのはむしろ当然とも言えました。この二人の間を取り持つ優秀な人材がいなかったことが、お互いの意思の疎通(そつう)を欠かせて、ついには兄弟で対立するという結果を生んでしまったのです。

義経は、生け捕りにした平氏の残党を引き連れて京都へ凱旋(がいせん)しました。憎しみの対象になっていた、平氏の没落の様子を間近に見た民衆から喝采(かっさい)を浴びた義経でしたが、怒りが収まらない頼朝からは「二度と鎌倉には入るな」と一方的に突き放されてしまいました。

そればかりでなく、頼朝によって自分の領地をすべて取り上げられ、暗殺までされかけた義経は、ついに頼朝との全面对決を決意しました。義経は後白河法皇から「頼朝追討」の院宣(いんせん、上皇＝法皇からの命令書のこと)を強引にもらうと、九州で再起を図ろうと考え、精鋭とともに船出をしましたが、不運にも嵐にあって難破してしまいました。

かつて屋島の戦いにおいて、嵐の中を短時間で四国に上陸を果たしたときと比べ、何という違いでしょうか。これ以降、それまでの幸運から見放された義経には、苦難の道が続くこととなります。

精鋭の大半を失った義経は、わずかの手勢を率いて、かつて自分をかくまってくれた奥州の藤原秀衡を頼って落ちのびました。なお、この逃亡の際において、北陸の安宅(あたか)の関における「勧進

帳(かんじんちょう)」の伝説が残されており、現代でも歌舞伎などを通じて有名になっています。

一方、義経が没落していったのと対照的に、後白河法皇の「大きなミス」につけ込むことで、頼朝の悲願であった「武士のための政治」を達成できる「大きなチャンス」がめぐってきました。

いくら義経に強制されたとはいえ、後白河法皇が「頼朝追討」の院宣を出されたことは「痛恨の失敗」でした。なぜなら、それまで平氏滅亡のために戦ってくれた頼朝を裏切ることになるからです。しかも、朝廷は自前の軍隊を持っていませんから、反発した頼朝に攻められてはひとたまりもありません。

義経が去った後の1185年11月、頼朝は妻の父である北条時政(ほうじょうときまさ)を筆頭とする大軍を京都へ送り、後白河法皇に迫りました。

「法皇様の命令によって平氏滅亡に尽力したこの頼朝を、こともあろうに討てとはどういうおつもりですか？」

後白河法皇をはじめとする朝廷は恐怖に震え上がり、頼朝側をなだめるために、やむなく二つの権利を認めました。後世に名高い「守護・地頭の設置」です。

守護は、設置当時は「追捕使(ついぶし)」といいました。後白河法皇に「義経追討」の院宣を出させることに成功した頼朝が、行方の分からない義経を捕まえるため、という名目で全国に追捕使を置くことによって、軍事・警察権を事実上握ることになりました。

また、地頭は公的に認められた土地の管理人ですが、その任命権が守護を含めて頼朝側にあるために、武士が初めて自分の土地を公的に所有できる道を拓(ひらく)ことになりました。

さて、その後の義経一行ですが、何とか藤原秀衡のところまでたどり着くことができました。秀衡は義経の戦術の巧(たく)みさを、来るべき頼朝との戦いの切り札にしようと考え、義経を手厚く保護しましたが、一年も経たないうちに秀衡が病死してしまいました。これも義経にとっては大きな不運だったのです。

秀衡の後を継いだ藤原泰衡(ふじわらのやすひら)は、父ほどの器量を持っておらず、頼朝からの「義経を殺せば藤原氏の安泰は保証する」という誘いに乗ってしまい、1189年に義経の住んでいた館を急襲しました。義経主従は奮戦しましたが、多勢に無勢ではどうしようもなく、ついに義経は妻子とともに自害して果てました。わずか31歳の若さでした。

なお、義経の最期の際に弁慶が彼をかばい、屋外で体中に矢を浴びて、立ったまま死んだとされる「立往生(たちおうじょう)」の話が伝説として残されています。また、義経を自ら殺したことによって、切り札を失った泰衡は、結局この後に頼朝によって倒され、約100年続いた奥州藤原氏は滅亡してしまいました。

源義経という存在は、いうなれば「歴史の神」が「平氏を倒すため」、ただそれだけのためにこの世に遣(つか)わした「英雄」でした。

だからこそ、平氏が滅亡した後に役割を終えた彼は、それまでの幸運から一気に奈落の底に突き落とされる不運を味わい、この世から「退場」させられたようにも見えます。

そんな彼のドラマチックな人生は、一般民衆の心にも深く刻まれ、敗者や弱者をいたわる「判官鼻肩(ほうがんびいき)」という特別な感情をもたらしました。

また、彼をこのまま死なせるのは余りにもかわいそうであるし、この世に恨みを残して死んだら怨霊(おんりょう)として祟(たた)るかもしれない、という思いが、様々な「義経不死伝説」を生み出しました。なかには、義経が海を渡ってジンギスカン(チンギス=ハーン)となり、モンゴルを統一したという話まであるほどです。

ところで、平氏が安徳天皇を引き連れて都落ちをした後に、後白河法皇が後鳥羽天皇を神器なしで即位させた話については先述しましたが、平氏が滅亡して安徳天皇が入水(じゅすい)されるまでの2年足らずの間は、実は我が国にお二人の天皇がご存在されておられたこととなります。

つまり、鎌倉末期から室町前期における「南北朝時代」と同じ状態になっていたのです。今回の場合は期間が短かったので目立たないのですが、もし平氏があっけなく滅びることなく、安徳天皇が長生きされておられれば、南北朝時代と同じように、混乱の時期が長続きしたかもしれません。

その場合は、京都と中国地方にそれぞれ天皇がおられるのですから、南北朝ならぬ「東西朝時代」と呼ばれたかもしれませんね。

いずれにせよ、そんな不安定な時代になりそうなのを一掃した源義経の存在は、まさに「歴史を変えた英雄」と呼ばれるにふさわしいといえるのではないのでしょうか。(完)

主要参考文献：「逆説の日本史4 中世鳴動編」(著者：井沢元彦 出版：小学館)
<http://www.shogakukan.co.jp/books/09379415>

「逆説の日本史5 中世動乱編」(著者：井沢元彦 出版：小学館)
<http://www.shogakukan.co.jp/books/09379416>

YouTube 再生リスト「平安後期の政治史」
https://www.youtube.com/playlist?list=PLeZrZWY-wML6YyVA8r6b_7yiJJ8ee0ZsE

黒田裕樹の歴史講座
<http://rocky96.blog10.fc2.com/>